

# 中村 哲先生 もう一つの風景

追悼の思いを込めて



堂園メディカルハウス  
院長 堂園晴彦  
haruhiko@dozono.co.jp



# 中村哲先生への追悼オマージュ

## はじめに

日本の良心であった中村哲先生が銃殺されてから、2020年12月4日で一年になります。中村先生への追悼の思いを込めて小冊子を作りました。

中村哲先生の活動に関しては、書物やテレビ等でしばしば報道され、皆様もよくご存じだと思います。

今回、中村先生と共に、長期に働いてきた仲間との交流を通して知りえた先生の人間性や、何故多くの方が中村先生と共に働く気持ちになったのか、また、私がパキスタンのペシャワールのミッション病院にボランティア研修に行き、そこで、実際経験し、感じたことを中心にお伝えしたいと思います。

## 中村先生との出会い

はじめてお会いしたのは、2001年の7月でした。

私は、2001年にNPO法人「風に立つライオン」を設立しました（現在は解散しました）。この法人は、私自身が2000年にインドコルカタのマザーテレサの施設で体験した「医療の原点」を医学生や若い医師や医療関係者に体験して欲しいと考え、設立しました。「良医」育成の原点を体験できる場所として、コルカタのマザーテレサの施設とアフガニスタンの中村先生の施設を選びました。

中村先生の存在を知ったのは2000年でした。

私の友人がペシャワール会の会員であり、パキスタンやアフガニスタンで、命がけで医療を展開している素晴らしい医師がいると聞きました。当時日本では、活動内容は殆ど報道されていませんでした。そのため、私も全く知らず、大したことはないだろう位にしか思っていませんでした。しかし、実際素直に調べてみると、想像以上の医療活動を実践されており、衝撃を受けました。

お会いするために、2001年7月に福岡まで出向きました。その時に同席されていたが後に知るのですが、鹿児島出身の福元満治様（石風社 代表取締役）でした。

お会いする目的は

- ① 医学生や若い医師を、ペシャワールのミッション病院を中心に研修させて欲しい。
- ② 鹿児島で講演会をお願いしたい。

その2点でした。即座に了承してくださいました。その時に、

「アフガニスタンで何を学べますか？」

と質問したら、少し口元を緩めながら、

「男が磨けるとですよ。今、日本では、男を磨ける場所がなかとですよ」と、博多弁で言われました。

「男が磨ける」という言葉に愕然としました。女性の方の中には、多少語弊があるかもしれませんが、不快感を持たれる方もいるかと思います。しかし、ペシャワールのミッション病院に行き、その意味がよく理解できました。

当時のアフガニスタンは日本の戦国時代のような状況で、各地方の豪族が武力でお互いに戦争をしており、誰が国を治めるか日々戦っている群雄割拠の時代でした。

アフガニスタンが男社会という意味ではなく、アフガニスタンの男性は、「自己意識」、「自己選択」、「自己責任」、「仲間意識」が強く、日本の男性に失われつつある「男気」が脈々と存在していました。つまり、アフガンの男性は、劣悪な社会、苛酷な自然環境の中で、「自分で努力し、自分で解決するために行動し、自分で責任とる生き方」をせざるを得ないという状況を、現地に行き知りました。「男を磨く」とは、その生き方や環境から種々のことを学べるという意味だと、理解できました。マニュアルやプロトコルの全く通用しない世界です。

2001年7月に最初にお会いした時、10月に鹿児島での講演をお願いし、快諾を得ました。ところが、9月11日に、ニューヨーク同時多発テ

口が起こり、中村先生は時の人となり非常に忙しくなられたため、講演会はキャンセルになると思っていました。しかし、予定通り開催することができ、中村先生は、約束は必ず守るという信義に厚い方だと、その時に強く思いました。

アフガニスタンで医療をはじめたのも、最初にアフガニスタンを訪れた時に、現地の人と約束したことを、実行するためでもありました。

その後も講演会を4,5回開催し、写真展も行いました。定期的に講演会をしましたのは、活動内容を多くの方に知って欲しいという点と、活動が着実に実を結んでいる現状を知ってもらいたいためでもありました。亡くなられた翌年2020年にも講演会を開催する予定でした。

## 中村先生の人柄と人間としての魅力

中村先生は福元氏に、  
「いつも同じ話で、みんなおもしろいですかね」  
と、聞かれたそうです。その時に、福元氏は  
「お念仏と一緒に、ありがたいですよ」  
と答えられると、中村先生が笑って納得されたというエピソードからも、先生のお人柄がわかります。

子どもにも、若い人にも、すべての人に対して、いつも、同じ姿勢で接しており、上から目線という言葉が最も似合わない方でした。ただ、注意はよくしていたそうですが、声を荒らげることがなかったそうです。内に秘めたる炎のような心の持ち主です。大学の同級生の話では、意外と好き嫌いは強かったそうです。

2003年の3月に、ペシャワールに医学生2名と若い医師1名、引率の医師1名、計4名を派遣しました。私はその年のゴールデンウィークの連休時に行き、現地で長期に医療活動をする医師1名が同行しました。私が現地に行った時には先生は帰国中でしたので一緒に医療活動はできませんでした。その時に、現地で接したすべてのスタッフから、中村先生への尊敬と感謝の言葉を伝えられました。

2020年の1月25日のお別れ会後の懇親会で福元氏とお会いした時に、「何故、中村先生の本を沢山出版することにしたのですか？」

と、質問したら、

「アフガンの難民やハンセン病の患者さんとの〈関係の深さ〉に嫉妬したんです。」と、話してくださいました。その話を聞き、「う～ん」と、唸るしかありませんでした。

それを物語る一つのエピソードがあります。アメリカのアフガニスタンへの空爆が始まったためパキスタンのペシャワールに避難していた時に、一人の老人がアフガニスタンから国境を越えてペシャワールにやってきました。その老人は、

「あなたの国の情勢はよく知っています。よくこのような国にPMSの皆様は井戸を掘りに来てくださいました。是非、また、井戸を掘りにアフガニスタンに来てください」

と、それだけを言うために、命がけで国境を越えて来たそうです。

多分、小泉政権がイラクへ自衛隊を派遣する派遣することを知っていたのでしょう。

中村先生は国会に呼ばれた時に、

「日本から遥か離れた中東や西アジアの人々は、日本を平和国家だと信じている。そんな中で、イラクへ自衛隊を派遣することは日本にとって自殺行為だ。有害無益の何物でもない」

と、力強く証言されました。日本人への平和への強く大切なメッセージです。

老人の行為のような素晴らしい話を、福元氏が代表をしている石風社から多数本を出版したことが、中村先生の現地の活動を全国的にしたといっても過言ではありません。嫉妬が生み出した成果とは知る由もありませんでした。

懇親会の席で、ペシャワール会の初期の頃、事務担当の方から聞いたエピソードです。

中村先生がアフガニスタンから帰られ、事務局に来られて椅子に座っていたそうです。当時はまだ、顔もよく知られていない時期であり、特別強

烈なオーラを出される方でないため、新しいボランティアの事務員が、ペシャワール会の入会案内のパンフレットを中村先生に持って行き、ペシャワール会への入会勧誘をして、大笑いになったそうです。

もう一人の女性の方の話です。

中村先生の講演を聞き、自分も一緒に働きたいと思い、40歳を過ぎてから看護師を目指しました。

一緒に働くためにはハンセン病の勉強が必要であると思い、ハンセン病病院付属の看護学校に入学し若い学生とともに、寮生活を送ったそうです。一緒に働く機会はなかったそうですが、何回もアフガニスタンのスタディツアーに行かれたと、誇らしげに話してくれました。

2001年、鹿児島にはじめて講演にお呼びした時のこと、出だしの言葉が、「バカボンのパパの中村です。これはアフガンとは関係ありません」と挨拶され、テロの後の重々しい会場の雰囲気、笑いを取って和ませてくださいました。よく、バカボンのパパに似ていると言われたそうです。

ニューヨークテロの直後の講演会なので、約500人収容できる会場は満席で、立ち見が出る程の大盛況でした。皆、緊張気味の雰囲気を最初の言葉で、ガラッと変えてくださいました。

日本キリスト教海外派遣医療協会（JOC S）の仲間で35年以上の付き合いのあった内坂 徹医師は、「中村先生は人間的に愛くるしいところがあり、私たちは「哲ちゃん」と呼んでいた」と、書いています。私もお会いして、厳しい目つきの中にも、ほっとさせる暖かさを感じていました。

講演会の時、質問ありませんか、と良く聴衆に投げかけていましたが、その時はいつも

「何でも聞いてください。怒りませんから（笑）」

と言われ、会場を和ませて、誰でも質問できる雰囲気にして下さいました。

## 中村先生が影響を受けた人々

### ① 内村鑑三

講演会の時に、高校生が先生のようにするには、どのような本を読んだ

らいいかという質問に、内村鑑三の「後世への最大遺物」を薦めていました。この本は明治30年に出版された古典的名著です。

武蔵野大学の貝塚秀樹教授は、この本には「誰にとっても実践可能な生き方とは何か、私たちは後世に何を残すことができるかが、主なテーマとして書かれている」と、解説しておられます。

「後世に遺すことができる第一はお金であるが、お金を稼ぐ才能の無い人は事業を遺せばいい。事業をなすための才能も地位もない人は思想、つまり、著述を遺せばいいが、誰もが思想を遺せられるわけではない。『「お金」も『事業』も『思想』も価値あるものだが、誰もが遺せるものではなく『最大遺物』といえない。

それでは、誰もが後世に遺せる最大遺物とは何か、内村鑑三は『勇ましい高尚なる生涯である』と、述べている」と、貝塚氏は書いています。

私は本を読み、内村鑑三は、『何をなしたか』ではなくて、『何をなそうとしたか』こそが最大遺物であると、伝えたかったのだと思いました。

中村先生の生涯は、正に『勇ましい高尚な生涯』であり、現代人が生きるのに必要なのは、『何をなしたかでなくて、今何をなそうとしているのか』であると、遺された私たちが問われている気がします。

その点は、特に亡くなられてからの色々な報道を通してより明確になっていると思います。

何故、中村先生はキリスト教徒の内村鑑三に惹かれたのか。

内村鑑三はキリスト教の中の社会派であり、その出発点が

「明治維新で日本はいい方向に向かっているのか。何が近代化なのか。明治維新で人間は、何が幸せになったのか」  
でした。

当時、明治維新からあまり年月も経っておらず、世の中の流れと全く逆の考えを堂々と主張してきた生き様に、多感な中学生の中村先生は魅力を感じ、そのような人が信じたキリスト教とはどのような宗教なのかとの思いから、キリスト教に惹かれ、キリスト教徒として生きるようになられたそうです。西南学院中学というミッションスクールに通っていたため、キ



リスト教を受け入れやすい精神的土壌もあったのでしょうか。

内村鑑三は「この世の中はけっして悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であるということを信ずることである。失望の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中でなくして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去るということであります」と、書いています。中村先生のアフガンでの活動はこの文章のままでした。

中村先生は大学時代には仏教研究会に入り、人生の後半はイスラム教の世界で生きました。そのため、キリスト教以外の宗教へ対する柔軟で寛容な姿勢を垣間見てとれます。

## ② 宮澤賢治

宮澤賢治にも強く惹かれていたようです。

2000年前後の数年間、アフガニスタンで医師として一緒に働いていた小林晃ドクターは、現地には、宮澤賢治の童話がたくさんあったと話してくれました。お子様方へ読み聞かせもしていたようです。

宮澤賢治賞を受賞した時の喜びを次のように書いています（抜粋）。

### セロ弾きのゴーシュ

小生が特別にこの賞を光栄に思うのには訳があります。

この土地で「なぜ20年も働いてきたのか。その原動力は何か」と、しばしば人に尋ねられます。返答に窮したときに思い出すのは、賢治の「セロ弾きのゴーシュ」の話です。セロの練習という、自分のやりたいことがあるのに、次々と動物たちが現れて邪魔をする。仕方なく相手しているうちに、とうとう演奏会の日になってしまう。てっきり楽長に叱られると思ったら、意外にも賞賛を受ける。

私の過去20年も同様でした。

幾年か過ぎ、様々な困難—日本では想像できぬ対立、異なる文化や風習、身の危険、時には日本側の無理解に遭遇し、幾度か現地を引き上げること

を考えぬでもありませんでした。でも自分なきあと、目前のハンセン病患者や、早魃にあえぐ人々はどうなるのか、という現実を突きつけられると、どうしても去ることが出来ないのです。まるで生乾きの雑巾でも絞るように、対処せざるを得ず、月日が流れていきました。自分の強さではなく、気弱さによってこそ、現地事業が拡大継続しているというのが真相であります。

よくよく考えれば、どこに居ても、思い通りに事が運ぶ人生はありません。予期せぬことが多く、「こんな筈ではなかった」と思うことの方が普通です。賢治の描くゴーシュは、欠点や美点、醜さや気高さを併せ持つ普通の人で、いかに与えられた時間を生き抜くか、示唆に富んでいます。遭遇する全ての状況が一古くさい言い回しをすれば一天から人への問いかけである。それに対する応答の連続が、即ち私たちの人生そのものである。その中で、これだけは人として最低限守るべきものは何か、伝えてくれるような気がします。それゆえ、ゴーシュの姿が自分と重なって仕方ありません。

私たちは、現地活動を決して流行りの「国際協力」だとは思っていません。地域協力とでも呼ぶ方が近いでしょう。天下国家を論ずるより、目前の状況に人としていかに応ずるかが関心事です。この思いも「イーハトーブ」の世界を心に刻んだ者なら、

「この中で、馬鹿で、まるでなまってなくて、頭をつぶれたような奴が一番偉いんだ（「どんぐりと山猫」）」

という言葉に慰められ、一人の普通の日本人として、素直に受賞を喜ぶものであります。

### ③ 石光真清

石光真清という名前を聞いてその存在を知っている人は、かなりの知識人だと思います。多くの人が「誰？それ…」と思うでしょう。中村先生も知らなかったそうです。私も全く知りませんでした。石光真清を中村先生に紹介したのは福元満治氏でした。

私はアフガニスタンで医療活動を一緒にしていた小林晃先生をインタ

ビューした時に聞きました。中村先生は石光真清の生き方に非常に感動・尊敬し、アフガンの人と接する際の参考にしていたそうです。

石光真清は満州方面でスパイ活動をしていました。同時期ロシアでスパイとして暗躍した明石元二郎がロシアの高官を中心に情報収集をしたのと異なり、地域の住民と親密に接しながら満州周辺でロシアの情報を収集しています。

パソコンで検索した石光真清の自伝の書評に、「石光の珠玉のような家族の情愛と友人との交流、天皇から底辺の人々に至る登場人物の幅広さ、事実は小説よりも奇なりを地で行く冒険譚など、理由はいくつも思いつくが、最大の理由を挙げるならば、それは真清が伸びゆく近代日本の激動の渦中に身を投じ、類稀な誠実さをもって時代を生き抜いた歴史の証人だから、ということになるだろう」と、ありました。

石光真清は熊本出身でした。幼少のころ西南戦争を観て深い影響を受けます。青年期からは、満州を中心に情報収集のためにスパイ的行為をしていました。単に日本のためというより、アジア解放の意識が強く、当時の九州の思想は、黒龍会や玄洋社のように、単なる右翼ではくくれない、右翼のような左翼、左翼のような右翼という独特の精神性があり、その影響も受けていたのでしょう。

中村先生の父親は社会主義者・社会運動家であり、あちこちの争議に行きストライキの指導者でした。何度も投獄されていたそうです。祖父・玉井金五郎は港湾労働者の総元締め玉井組の組長であり、共に、弱者の味方、社会奉仕家とも考えられます。玉井組は時々ヤクザ組織と間違われると、中村先生は笑いながら話されます。

中村先生が石光真清の正義感に惹かれており、また、石光真清の小説は膨大なメモを息子の真人がまとめて本にした親への畏敬と賛歌であり、自分の祖父や父親をみる視点と似たものを小説から感じていたせいもあるかもしれません。

それ以外では、祖母の玉井マンさんや祖父の長男の小説家火野葦平の影響も強く受けています。特にマンさんとの交流が深く、マンさんは熱烈な「愛

国の母」であり、マンさんから

「弱者は率先してかばうべき、職業に貴賤はない、どんな小さな物の命も尊ぶべきである」

ということを繰り返し聞いていたそうです。

火野葦平さんに対しては、単なる人間性だけでなく、戦争協力者と戦後バッシングにあい自決の道を選びました。火野氏は遭遇した騒乱や血なまぐさい出来事、人の世の醜さにまみれながら、それを超えて現存する美しい作品に圧倒されたようです。石光真清も不遇な晩年でしたが、二人に共通するアジアの開放のために、信念を曲げずに生きる生き方に、引かれたのでしょう。

火野葦平の代表作は「花と龍」です。何度も映画化されています。映画（マキノ雅弘監督、高倉健。藤純子出演）を観ると、一見やくざ映画そのものとしか思えません。しかし、その中のセリフに、火野葦平の思いのこもった言葉があります。

○男は自分がこうと思ったことに体を張って生きていかないといけない

○人間は裸一貫、自分の正しいと思う道にまっすぐに行け

これらの言葉に中村先生が、強く影響を受けていることは生き様から、自明の理です。また、

泥に汚れし背囊に さす一輪の菊の香や

異国の道をゆく兵の 眼にしむ空の青の色

と、言葉を残しています。

中村先生は、異国に駆り出された日本への悲哀と郷愁が込められていると述べ、日本兵の多くが農民であり、アフガニスタンの農民も貧困から傭兵になっていく姿がオーバーラップしたのだと思います。

哲学にも造詣が深く、フランクフルトやヤスパースの考えに共感し、ヤスパースの

「一人で成り立つ自分はない。自分を見つめるだけの人間は滅ぶ。他者との関係において自分になりたっている」

やフランクフルトの

「悩む者に必要なのは、因果関係の分析で無意識を意識化するのではなく、意識を無意識の豊かな世界に戻すことである」

と著書「天、共に在る」の中で書いています。

これらの経験が、イスラム教に接したときに、特別な違和感を持たず、むしろ自分の思いが確認され、誰とでも共通の土俵で話ができたと感じるように思う、とも書いています。

## 同志たちからの言葉

福元満ペシャワール広報担当理事

ペシャワール会の広報担当理事であり、30年以上も活動を支えてきた出版社「石風社」（福岡市）代表の福元満治氏は、「経済至上主義の物質的な豊かさとは無縁で、なおかつ清貧だとか平和を声高に語ることはない。理想について説教をすることなく、具体的に実践する。かといって聖人君子とも違う。ちょっとあまのじゃくで、物質文明の中で、それと異なる世界を見ている人がいた。それが中村先生だった。」と、語ってくれました。

福元氏は中村先生が新聞に寄稿した文章を読み、「患者やアフガン難民との関係の深さに嫉妬した。この人の本は自分が出さなければと思うと同時に、本を出せば編集者と著者との付き合いにとどまらない予感があった。ただ、その後パキスタン・アフガニスタンに20回以上も行くことになるとは、思いもしなかった」そうです。

30年以上にもわたって危険な地で何故活動を続けることができたのかと問うと、

「そこに倒れた人がいたら逃げるわけにはいかん。男ならやらんといかんだろう」

と中村先生は話し、「メンタリティーは古い明治人のような人物だった。『憲法9条があって、天皇陛下がいて、日本だ』と言う人で、伝統社会の美意識が芯にある人だったと、評価しています。

中村先生は、同時多発テロ後、干ばつで荒れた農村の復興を目指す「緑の大地計画」を立案し、翌年から「薬では飢えと渴きは治せない」「100

の診療所より1本の用水路」として用水路建設を始めました。用水路建設の第一歩は中村先生と一緒に福岡の書店に河川工学の本を買いに行くところから始まり、殆ど独学だったそうです。

干ばつでガチガチに固まったアフガンの荒れ地に二人で立った時に中村先生が『ここに用水路を通すばい』と言った時に、私にはアフガンのあの地が緑に変わるなどとは想像できなかった。でもそれが緑の沃野になった」。2003年から用水路作りをはじめ、全長約25<sup>キロ</sup>に及ぶマルガリート水路は7年後の2010年に開通した。

「中村先生は平和運動を目指していたわけではない。井戸を掘り、用水路を造り、難民に仕事を取り戻し、結果として治安が良くなった。用水路を造れば、学校や市場やモスクができる、平和運動ではなく実のあることをしただけだと思う。本質的なことを大地に足をつけて実践していく人だった」と、語ります。

一方で、用水路完成後も洪水などによる被害を住民の視点で考えていたのは、中村先生だけだったかもしれない。その意味では、「孤独な人だった」と福元さんは指摘します。そして、「そこまでの重圧を一人で抱えていた。**【志が高いというよりも、志の深い人】**だった」という言葉には衝撃を受けました。志の深い人が今の日本にいるのだろうか、刃を突き付けられたような言葉です。

現地のイスラム教徒が中村先生に、「あなたはクリスチャンなのになぜイスラムのために力を尽くすのか」と、問いかけられた時に、中村先生は「あの雪を冠った山の頂を見ろ。目指す聖なる場所は一緒だ。それぞれ登り口が違うだけだ」と、答えられたそうです。

「中村先生を聖人君子のように持ち上げるのは違和感がある、本人もそれは望んでいないはず。『人はそれほど美しくはないが、それほど醜くもない』と言う人だった。そういう中村さんを信頼した」と話してくれました。中村先生の死後、「偉人」とか「英雄」とか称されていますが、本人はそのような称号は全く望んでいませんでした。

息子さんへも「口先だけじゃなくて行動で示せ」「俺は行動しか信じない」

と言っていたそうです。

マザーテレサやチェ・ゲバラの活動と共通する現場主義を感じます。

経済至上主義や物質的な豊かさとは無縁で、なおかつ清貧だとか理屈をこねるだけの人たちとも違う。理想について説教をすることなく、黙々と具体的に実践した。結果として砂漠化した荒れ地が緑に甦った。そんな生き方が多くの人たちの心を揺さぶったのではないか」。中村さんの死後、多くの人からお悔やみの言葉を言われ、思いがけない人たちから香典を頂いた。

「最後は日本で死にたい」と、現場にこだわり続けた中村さんを「伴走者」として支え続けた福元さんに、漏らしたこともあったそうです。

福元さんは、後継者について尋ねたことがありました。中村先生は、

**【私の後継者は用水路だ】**

と、一言答えたそうです。

農民が用水路を必要とする限り用水路を墓標と考えると、アフガンの地で中村先生は生き続けるでしょうし、多くの日本人の心の中にも生き続けるでしょう。

### 小林晃医師

小林晃先生は、1997年から2001年までアフガニスタンで医療活動をしており、中村先生が帰国した時には、医療活動の中心的役割を担っていました。小林先生が、先生の趣味について話してくれました。

中村先生はクラシック音楽を聴くのが趣味で、特にモーツァルトとバロック音楽が好きで、当時は、バッハとヴィヴァルディの曲が先生の部屋からよく流れていたそうです。現地で夜はクラシック音楽を聴きながら、その日の活動内容や原稿を書いたり、仕事の計画を夜遅くまでされていたそうです。

音そのものにも強い関心があり、大阪での講演会の後、小林先生に大阪の日本橋でんでんタウンに案内してもらい、店頭にあるスピーカーメーカーのSUN SUI社の大きなスピーカーから流れる音に子どものように耳を

傾け、聞き入っていたそうです。

食べ物や味にはあまり興味がないようで、何でも美味しいと食べたそうです。たまに日本人ワーカーが日本食を作った時にも、特別感動する様子もなく、いつものように食べていたそうです。

連日、脂っこい病院食に飽きた時は、パキスタンのスワット地方で生産される日本の米に近い米を洗わずに炊いて、インスタントラーメンと一緒に食べていたそうです。洗わないで炊いた米はパサパサ美味しくなかったので、小林先生も一度勧められて食べてみたそうですが、その後は丁重に断っていたそうです。中村先生は、米は洗って食べると栄養素が流れてしまうと言って、洗わないで食べていたそうです。

中村先生が、「私はよく『ペシャワールやアフガニスタンのような危険な所で活動されておられますね、等々』感心されたり、変に思われたりしますが、日本のストレス社会で働いているほうが大変だと思うのですが」と、話しておられたことが印象に残っているそうです。

著者が現地に行った時に、現地のスタッフに、引きこもり、登校・入社拒否、過労死の話をしてても全く理解してもらえず、ストレスの概念が日本とは全く異なっていると、思いました。

息子さんにはいつも「言葉より、行動で示せ」と、話していたそうです。

中村先生が今回このような事件に遭いましたが、ペシャワール会会報に、「愛憎も苦楽も悲しみも喜びも、ここでは手ごたえのしっかりした人間と神がいることを幸せに思っています。」と書かれているように、苦勞の絶えない人生でしたが、一方で見方を変えれば幸せな人生を先生は送られたのだと思いたいと、小林先生は話されました。

著者の精神科の恩師が、「死に臨んで最も有効な処方方は納得である」と教えてくださいましたが、誰よりも納得いく人生を送られたのかもかもしれません。

藤田千代子看護師

私が2003年にペシャワールにボランティア研修に行った時に、色々面



倒をみてくれたのが藤田看護師でした。鹿児島出身で同郷のよしみもあり、すぐに打ち解けて現地では鹿児島弁で話をしていました。その後も、講演会や写真展の時に会い、話しをしています。

当時はニューヨーク同時多発テロの影響があり、空は戦闘機がひっきりなしに飛び、機関銃をもった兵士をちらちら見かけました。日本の自衛隊海外派遣問題もあり、ピリピリした雰囲気を感じました。ペシャワールの病院に着き、最初に言われたことは「病院の外に出ても遠くに行かないように、狙撃される心配があるので」でした。その頃、ペシャワールにもマクドナルドができたのですが、開店後三日後に爆破されたそうです。

折角ペシャワールに来て街に出られないのかと少しがっかりしていましたが、藤田看護師のはからいで、現地の男性看護師とバザールに行き、本場の羊の肉料理を堪能できました。インド料理ほど香辛料を使用しておらず、食べやすかったです。特に羊のモモ肉は絶品でした。

中村先生の長年片腕のような存在だった藤田看護師は1990年から現地で働き始め、現在は博多のペシャワール会の事務局で働いています。

「何故、中村先生の所で働こうと思ったのですか？」

と、質問しました。

「たまたま勤務していた病院に中村先生が講演に来られました。私はマザーテレサの生き方を尊敬し、いつかはコルカタのマザーテレサの施設に行ってみたいと、思っていました。中村先生の講演で、現地の女性は男性には肌を絶対にみせない。ハンセン病の人は皮膚の病変が多いため、女性の医療スタッフが欲しいという話を聞き、あまり深く考えないで、いわゆる一大決心したわけではなく、行ってみようと思いました」

と、話してくれました。

「なぜ、20年以上も現地で働けたのですか？その原動力というか、モチベーションは何でしたか？」

と聞くと

「ハンセン病は慢性疾患で、患者さんとは何年もお付き合いすることになります。特に、良くなった人との交流は長年続き、病気は治っても会いに

来る人が沢山いると、情が移ってしまい、気がついたら20年経っていました。心の琴線に触れたことが沢山ありました。私自身プライベートなことで、帰国して日本で暮らすかどうか迷った時期もありましたが、現地に残りました」

と、明るく話してくれました。

中村先生はペシャワールのミッション病院ができた時に、「病院の門は24時間カギをかけないで開けていなさい。ハンセン病以外でもあらゆる患者さんでも、いつでも診察するように」

と、指示したそうです。患者さんがいつ来てもいつでも診るという方針で、中村先生自身も夜も診察されたそうです。その後ろ姿をすべてのスタッフがみているので、皆がついていくのは当然としか、思えなかったそうです。

地方に診療所を作る時には、まず、その地方出身の病院スタッフと同行し、現地の長老と話し合いを持ったそうです。アフガニスタンは部族社会であり、部族の長老が強い権力を持っています。いきなり、あなたたちのために診療所を作ってあげますと言っても、上から目線で話をしても受け入れられない土壌です。必ず土地の人を巻き込んで、診療所を開設し、「自分は医者で患者さんをその地域で診察できればそれでいい」と、話していたそうです。藤田看護師は、中村先生は一見ぶっきらぼうにみえそうですが、そのコミュニケーション能力の高さを非常に評価していました。

その点は、石光真清が満州の人々と深く付き合い、現地の人から慕われていた点から学んでいたのかもしれない。石光真清はアジアの開放を思い活動し、中村先生は医師として病苦からの開放を目指したのでしょう。

中村先生がいつも自分たちの活動は国際協力ではない、と言われていることが理解できます。

藤田看護師に、

「中村先生は、マザーテレサのことはどう思っていましたか？」

と、質問しました。藤田看護師も私も最も尊敬する人がマザーテレサです。著者と藤田看護師もマザーテレサを尊敬する想いの縁から知り合い、その縁で中村先生とご縁があったと言っても過言ではありません。

インドとパキスタンは隣国であり、マザーテレサの情報は入っていたそうです。マザーテレサがノーベル平和賞を授与されたことも当然中村先生も現地の人も皆知っていました。次は中村先生をと機運が盛り上がりかけた時に、先生は、

「あんな賞をもらうと、忙しくなりすぎる。そうすると、静かに診察させてもらえなくなるから大変だ。」

と、あまりノーベル賞には関心がなかったようです。マザーテレサがノーベル平和賞を授与されたのが1979年、69歳の時です。中村先生もその年の頃に打診があったら、まんざらでもなかったかもしれません。

空爆以降、藤田看護師の働きは増し、特に水路建設が始まり、先生がアフガニスタンに水路作りに行っている時の留守番診療の時は、特に忙しさが増したそうです。私が、大変でしたねと話を投げかけると、  
「中村先生は、水路を作っている時も、時々ペシャワールの病院で診療をしていましたよ」

と、話すのを聞き、びっくりしました。あらゆる報道が、「中村先生は医者をやめて水路作りに専念しているという」内容でした。私が、

「えっ」  
と言うと、

「日にちを決めて、ハンセン病患者さんの切断手術や皮膚移植の手術をしていました」

と聞き、ああ、中村先生の原点はやはり医者なのだと、深く思いました。

私は、  
「イギリスで勉強をして帰って来た優秀な医者がペシャワールにも二人いたではないですか？」

と、質問すると、

「外科が弱かったです。ハンセン病患者さんの病変の切断や皮膚移植を中村先生のように、上手にできる医者がないのです」

と、話しをしてくれました。私が現地に行った時も、胸水の患者さんがいて胸水穿刺を頼まれました。

中村先生は水路の仕事に専念しながらも、「必要にせまられて、ペシャワールで手術をされていました」

とも、話してくれました。女性の手術の時には、宗教上の問題で女性は男性には肌を見せられないため、藤田看護師は夫や家族の男性によく説明、説得し、手術には一緒に助手として立ち会っていたそうです。

藤田看護師の働きぶりは、八面六臂の活躍と思います。中村先生が女性の患者さんをしっかり診察できたのは、藤田看護師の存在がなくてはならなかったと思います。

### 堂園晴彦

私は同志と言えるかどうかわかりませんが、個人的に同志と思っています。それは、2001年10月の最初の講演会の時、私が1996年にホスピスを開院しており、命の貴さを大切にしている点で結びついていると話されたことから、感じています。

2001年の講演会の直後にお手紙を頂きました。

「せっかく『いのち』の話をしていただき、現地でのできごとは何ともいえぬ気持ちでおります。力を尽くしたいと存じますので、所はかわってもいのちの重みをしっかりと伝え、メッセージを行動をもって送りたいと思います」中村哲。

2003年5月に私は、ペシャワールに行きました。当時私はうつ気味でした。すると、旅立つ前に電話で「ペシャワールは何もないですよ。でも、何もないから工夫するとですよ。ゆっくり休むつもりで行くとよかとですよ。」

と、話してくださり、ずいぶん楽な気持ちで行くことができました。

それ以来、時々講演会でお会いして話をしたり、電話で話をしたりしておりました。私の心の中では「中村先生はアフガニスタンで頑張ってください。私は国内で頑張ります」という気持ちが強く根付きました。

## 義侠心・任侠道に生きた人生

私個人的には、中村先生の悲劇は西郷隆盛の最後と似ている気がします。

内村鑑三は著書「代表的日本人」の一人に、西郷隆盛をあげています。この本の主題は、登場人物がキリスト教の持つ精神性にも勝るとも劣らない人間を超えた深い精神性を抱いている点を明らかにしたことです。

中村先生は数万人のペシャワール会員や支援者の期待と希望を一身に背負って生きていました。また、寄付金も半端な金額ではありません。絶えず、「途中で投げ出したくない。自分は絶対に逃げないんだ」と、話していたそうです。

親分が出入りの時に逃げ出すわけには行きません。先頭にたつて背中を見せてこそ、親分です。中村先生は小学校の次男の方が脳腫瘍でなくなられた時も、帰りませんでした。その心中を察するに、先頭に立つ人間の孤独感と寂寥感を禁じえません。

「道で倒れている人がいたら手を差し伸べるーそれは普通のことです」と、述べています。義を見てせざるは勇無きなり、これは正に、義侠心（弱い者を助け、強い者をくじく気風、おとこだて）であり、任侠（強きをくじき、弱気を助ける、男気）道の世界です。

中村先生は若松で育ちました。この地域で育った人を九州では「川筋もん」といい、一目置く風潮があります。その代表が高倉健さんです。

### 中村先生への個人的な思い

中村先生が死を通してでも伝えたかったのは、

**【日本人よ、人間を磨け】**

ということだと思えます。それは、「先生、アフガニスタンには何にもなかとよ。だから工夫するとよ」と話してくださったことから理解できます。

先生が65歳の時にお呼びした講演で、

**「これから最低10年は頑張る。その10年でじじいを磨く」**

と、私に話されました。残念ながら、8年でこの世を去られました。

**「死を通して永遠の命を得るを悟る」**

と、フランチェスコの「平和の祈り」の一節にあります。

一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん。

もし死なば多くの果を結ぶべし（詩編90章 ヨハネ12章）

私たちの魂には、中村先生は「永遠の命」

として、存在し続けるでしょう。

### 最後に…中村先生からのメッセージ

中村哲先生が最も好まれた言葉が、伝教大師最澄の「照一隅」（一隅を照らす）です。

「国の宝とは、自分の周りから照らす人。どんな小さなことでも、その明かりが次から次へと広がっていい世の中になる」でした。

多くの日本人が見向きもしないような遠い地のアフガニスタンでこつこつ井戸を掘り水路を作り続けた人生は、一隅を照らすそのものでした。

混沌としつつある現在の日本に、中村哲先生の生き方は、一体私たちに何を投げかけているのでしょうか。死後2、3か月経つと話題に乗らなくなる人が多いなか、時とともに中村先生の存在感は増していっています。

私は、付和雷同することなく、自分の考えで行動し、自分の足で立って歩けと、その行いの歴史から語りかけている気がします。

中村先生、長い間ご苦勞様でした。そして、ありがとうございます。

あなたは日本の良心でした。

ペシャワール会広報担当理事・石風社代表取締役 福元満治様のご校閲に深謝いたします。

---

著者 堂 園 晴 彦

堂園メディカルハウス院長

〒890-0052 鹿児島市上之園町3-1

TEL 099-254-1864

haruhiko@dozono.co.jp

---

2020年12月4日発行



